

1 富士のねの絶えぬ思ひをするからに常盤に燃ゆる身とぞなりぬる

かきのものひとまる
柿本人麻呂

【歌意】 富士山の火のように絶えることのないあなたへの思いで、私の身も心も永久に燃え続けることになってしまった。

〈鑑賞〉

この当時富士山は活火山として煙をあげていました。その火のようなあなたへの「思ひ（思火）」で、自分自身も常に燃えているというのです。「常盤」は、常に変わらない岩や永久に変わらない様子を表す言葉です。

2 田子の浦ゆうち出でてみれば真白にそ不二の高嶺に雪は降りける

やまへのあかひと
山部赤人

【歌意】 田子の浦を通って海辺に出てみると、真つ白に、富士山の頂には雪が降り積もっていることだ。

〈鑑賞〉

この歌の「田子の浦」は今の蒲原辺りではないかと言われています。西から来るとこの辺りで視界が開け、作者は真つ白な富士山が見えたときの清新な感動を詠んでいます。この世に二つとない「不二」の山と遭遇することが出来た忘れがたい感動を。

3 富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

たかはしのむしまろ
高橋虫麻呂

【歌意】 富士山の頂上に降って残っていた雪は、真夏の旧暦六月十五日に消えたと思つたら、その夜にはもう雪が降ったことだ。

〈鑑賞〉

旧暦の六月は現在の暦では真夏です。冬に降った雪が見えなくなつたと思つたら、もうその夜には雪が降つたと、一年中雪が絶えない富士山の様子を表現しています。

4 時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ

ありわらのなりひら
在原業平

【歌意】

季節の分からない山は富士山だよ。今をいつだと思つて、鹿の背中の模様のように雪がまだらに降っているのだろうか。

〈鑑賞〉

「伊勢物語」の主人公が都から東に向かい、富士山を見たときの歌です。夏なのに、まだ、まだらに雪が残っている様子を、「時知らぬ」（季節がわからない）と表現しています。

5 験なき煙を雲にまがへつつ世をへて富士の山と燃えなむ

きのつらゆき
紀貫之

【歌意】

思つてもかいない思い（火）の煙を雲に紛らせながら、富士山の煙のように晴れることもなく、私もあなたへの思いに燃えることだろう。

〈鑑賞〉

歌の中に「恋」「思ひ」という言葉は使わずに、富士山の煙を詠むことで絶えることなく続く恋の気持ちを詠んでいます。作者は醍醐天皇の依頼を受けて、『古今和歌集』を編纂し、その序文も執筆した人です。

6 人ひとしれず思おもひするがのふじのねはわがごととやく絶たえず燃もゆらむ

伊勢いせ

【歌意】 他人に知られないように恋をする私は、まるで駿河の国にある富士山のようだ。こんなふうにも「思おもひ（思火）」を燃やしている。

〈鑑賞〉 「思おもひ」を「する」と「駿河」との掛詞かけことばです。わが恋とかけて富士山と解く。その心は、いつも燃えているというわけです。

7 世よの人のおよばぬ物ものは富士ふじのねの雲居くもいに高たかき思おもひなりけり

村上院むらかみいん

【歌意】 世の中の人の手に届かないものは、雲よりも高くそびえる富士山だ。その富士山のように、私のあなたに対する思いも遠く届かないなあ。

〈鑑賞〉 この歌も、手の届かないほど高い富士山にたとえて、相手に届くことのない自らの恋心を歌っています。雲よりも高くそびえているあの富士山のように、見えてはいるのに決して届くことのない想いとせつなき。

8 富士ふじのねのけぶり絶たえなむたとふべきかたなき戀こいをひとにしらせむ

和泉式部いずみしきぶ

【歌意】 富士山の煙もきつと絶えるときがあるだろう。しかし、私の恋心は絶えはしない。たとえる方法もないその恋をあなたに伝えよう。

〈鑑賞〉 富士山の煙は絶えても、私の思いは絶えることがない——あの富士山の煙にすらたとえることができないうのです。平安時代を代表する女流歌人の一首。情熱あふれる恋の歌を多く残した作者です。

9 **いつとなく心空なるわが恋や富士の高嶺にかかるしら雲**

さがみ
相模

【歌意】

いつということもなく、私の心は恋によってうつろになってしまった。富士山の山頂にかかるあの白い雲のように。

〈鑑賞〉

恋によってふわふわとしてしまった自分の心を、富士山にたなびく白い雲にたとえています。恋した心も、流れてゆく白い雲もどちらもはかなく、つかみどころがないものですね。十一世紀初頭の女流歌人の一首です。

10 **風になびく富士の煙の空にきえてゆくへも知らぬ我が思ひかな**

さいぎょう
西行

【歌意】

風になびく富士山の煙は空に消えてその行方も分からない。まるで私自身この思いと同じように。

〈鑑賞〉

空に消えていく富士山の煙と自らの思いとを重ねています。諸国を行脚しながら求道と作歌に人生をかけた、旅多き歌人・西行の代表作です。

静岡県で詠まれた「年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけりさ夜の中山」という一首も有名です。